裸足の皇女（はだしひめみこ）

永井路子

文春文庫

裸足の皇女（はだしのひめみこ）

定価はカバーに表示してあります

1992年11月10日　第1刷

著　者　永井路子
発行者　新井　信
発行所　株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3－23　〒102
TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本　Printed in Japan
ISBN4-16-720027-9

文庫

裸足の皇女

永井路子

文藝春秋

裸足の皇女／目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

冬の夜、じいの物語……9
裸足の皇女……35
殯の庭……79
恋の奴……125
黒馬の来る夜……149

水城相聞……177
古りにしを……205
火の恋……233
妖壺招福……259
あとがき　287
解説　磯貝勝太郎　292

初出

冬の夜、じいの物語「別冊文藝春秋」182号・一九八八年一月
裸足の皇女「オール讀物」一九八七年十一月号
殯の庭「別冊文藝春秋」187号・一九八九年四月
恋の奴「小説新潮」一九七四年四月号
黒馬の来る夜「別冊小説新潮」95号・一九七四年七月
水城相聞「別冊小説新潮」96号・一九七四年十月
古りにしを「別冊小説新潮」98号・一九七五年四月
火の恋「文藝春秋臨時増刊　日本縦断万葉の旅」一九七三年五月
妖壺招福「オール讀物」一九八八年八月号

単行本

一九八九年十一月文藝春秋刊

裸足(はだし)の皇女(ひめみこ)

冬の夜、じいの物語

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

一

燠は竈にまだ燃え残っていた。外の雪嵐がどおっと吠えるごとに、燠の灯色は明滅し、しだいにその色は心細げになりつつある。これが燃えつきてしまえば、もう今夜くべる薪はない。

なのに、白檀のじいは、まだ薄い糟酒をすすりながら、ぶつぶつ呟きをくりかえしている。

――酔えばとめどもなく、くりかえすあの話だわ。

いつもの亜香女なら、

「わかったわ、おじいさん。もう寝てよ」

白檀じいの肩を押して、少し邪慳にそう言うところなのに、聞きなれたその話を、もう一度聞いてやろうという気になったのは、外を吹きあれる吹雪のせいか、燠の頼りな

いまたたきのせいか。

「そうだよ、あまり美しうていなさるというのはな、禍々しいもんじゃ。俺は童のころ、あの姫さまのお顔を見るたびに、体が震えたもんだった。こう、背中がぞくりとしてなあ」

亜香女が聞き手になってくれると知って、白檀のじいは、目脂をこすりながらこう言った。じいは亜香女には大伯父にあたる。妻訪い婚のそのころ、女は夜ごとに通ってくる男を迎え、朝になると送り出す。一生自分の家を離れずに、そこで子供を産み育てるのだ。祖母はこんなふうにして娘の紀佐女を産んで育てて世を去った。祖母の兄の白檀も、この家から女の許に通い、朝になるとここに帰ってくる。祖母が死んだ後は、姪の紀佐女のめんどうをみ、紀佐女が亜香女を残して早死した後は、亜香女は、じいに育てられて成人した。

じいが体が震えるほど美しかったというのは、大豪族の蘇我氏の娘、小姉君のことだ。

「姫さまがお歩きになると、かぐわしい香りが漂った。うっとりするほどの甘い匂いじゃった。輿をかついでいた俺は、もう、ものに酔うたような気分になってな」

白檀は蘇我家の奴だったのである。

「そりゃ韓渡りの香料をつけておいでだったのよ」

亜香女が言っても、白檀は、いいやと頑強に首を振る。

「いいや、おからだから匂いたつ香りじゃ」
「どうしてわかるの」
「湯浴みをなさる間、俺は見張りに立ったもんじゃ」
悲しいことに、貴族たちは、奴を人間並みに考えていない。だから女も、彼らの前に肌をさらすことに、まったく恥じらいを感じないのだ。
「姫さまの眼には、俺は番犬としか映らなかったろうよ」
白檀は、少し悲しげに鼻汁をすすった。その白檀の前を、うっとりするほどの香りを漂わせて、白い裸形は通りすぎていった。白檀はかすかに漂うその香を抱いた。香りが形となって、白檀にまつわりつく……と思ったとき、湯浴み屋のほうから、悲鳴が聞えた。
「あっ、駄目。誰か来て！」
あきらかに、小姉君と、湯浴みに奉仕する侍女たちの声だった。我にかえって、白檀は湯浴み屋の扉のほうに突走る。その瞬間、内側から戸がひきあけられ、裸形の男が飛びだしてきた。
「うぬっ」
出会いがしらに体当りをくわせると、男は一瞬よろめいたが、たちまち白檀を足蹴にして、飛ぶように姿を消した。男は小姉君が湯浴み屋に入るより前に、中にひそんでい

たのである。
「なんということです、そなた、湯浴み屋の中を、ちゃんと見廻っておかなかったの？」
唇を震わせ、あわてて乱れた衣を掻きあわせながら、侍女たちは白檀を激しく叱責した。
「俺は杖で打たれた。気を失うばかりにな。姫さま付きの役目も即日お払い箱よ」
まだ十幾つだったころの事件を、白檀は、まるで数年前のことのように語り、それから晴ればれと微笑むのであった。
「うん、それでもよかったんだ。俺は」
「どうしてよ、じい」
「俺は、湯浴み屋の中の姫さまのおからだを、しっかりと拝むことができたんだ」
小姉君は黙って立っていた。驚愕のあまり我を忘れていたのだろうか。両の手を下げたまま、侍女たちのように肌をかくすことさえ忘れて……
「まっ白なおからだだった。立っておられるだけで、湯浴み屋の中にはかぐわしい香りが漂っていたぞ。亜香女、姫さまは、なにもまとってはおられなかった。それなのに、湯浴み屋には、あの姫さまの香りが漂っていたんだぞ」
亜香女は、その夜、白檀じいの話にあえてさからいはしなかった。その湯浴みの折に

こそ、小姉君は、韓渡りのふしぎな香料を溶かした湯を、惜しげもなく浴びたのかもしれないし、じいの眼を避けようともしなかったのは、それこそ、じいを人間並みに見ていなかったからではないか。

が、その日小姉君の白い裸形を見たことを、生涯の唯一の思い出としている白檀じいに、そのことを告げるのは残酷というものだろう。それより聞きたいのは別のことだった。

「ね、じい、その湯浴み屋から逃げた男を、じいは見たんでしょ」

「あ、うむ……」

じいは曖昧なうなずきかたをした。

「誰なの、それは」

「知らん」

「だって、出会いがしらに、その男に当て身をくわせたんじゃないの？」

「うむ、それはそうだが……」

白檀は、かすかに苦渋の色を頬ににじませて小さく呟いた。

「が、顔は知らん」

「どうして？」

「黒い衣で蔽っていた」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor